

今年125周年を迎える中央大学。125周年の歴史の中には、様々なエピソードが存在します。中央大学創立125周年記念サイトでは、「歴史で辿る中央大学」として、本学の歴史にまつわるエピソードを紹介しています。今まで知らなかった中央大学の新たな一面を発見してみたいはいかがでしょうか？

【Campus】 神田から多摩への軌跡

1944
“昭和19”

1 遠き別れにたえかねて
この高樓(たかどの)に登るかな
悲しむなかれ我が友*1よ
旅の衣をととのえよ



出陣予科生の壮行会

戦地に赴く友に送る 惜別の歌

学生歌「惜別の歌」は、戦地に赴く学友を送る歌として唄われ、後も別れの歌として愛された。作曲家 藤江栄輔は回顧している。

“ 入学した昭和19年暮から陸軍造幣廠に動員された。作業に明け暮れる中、友人中本は隣で働く女学生から、手書きの詩を受け取ったという。中本は戦争に対する自分の無力と「もうすぐ死ぬ」という力に支配される不条理を語りながら、その詩を見せた。島崎藤村の詩*1であった。

それは自分の中で旋律となった。間もなく仲間召集令状が届き、何もなかった我々は皆でこれを唄った。やがて自分も中本もこの歌に送られ戦地に赴いた。そして、中本はついに帰ってこなかった。(要約) ”

ざりざりの状況の中、若者たちのやるせない思いが、戦時の間の中で交錯する。そんな中で生まれた歌である。

*1 島崎藤村の原詩は「友」ではなく「姉」であり、藤村が姉との別れを唄ったものである。藤江はこれを「友」に変えて「惜別の歌」とした。後にレコード化されるとき、藤江は藤村の子息を訪ねその諒承を得た。

Time Machine Topics 【サイパン陥落】

7月6日～7日サイパン守備軍玉砕。これにより日本はB29爆撃機の航程内に入り、11月からの本土戦略爆撃へとつながった。この年、紀伊半島東を震源とする東南海地震が起きる。M7.9、死者998人。

125周年記念サイトではこの他に、「わたしと中央大学」というコンテンツで、各界で活躍中の本学にゆかりのある方のエピソード紹介や皆さんからのエピソード投稿も受け付けています。ぜひ、皆さんのとってきおきのエピソードを投稿してみてください。

詳細は、中央大学創立125周年記念サイトをご覧ください。

中央大学創立125周年記念サイト <http://chuo125.jp>

編集室

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

Chuo
ちゅうおう

2010

早春号

2010年(平成22年)3月24日発行 No.215

発行 中央大学広報室

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2048

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141

ご卒業おめでとうございます。いよいよ社会人の仲間入りですね。期待に胸膨らませる一方で、ちよつぱり不安も抱えているのではないのでしょうか。でも心配するより、新しい「縁」ができることを楽しみにしていたらいかがでしょうか。

血筋である親族との「血縁」にはじまって、住んでいる地域との「地縁」、それに学校で先生や友人とつながった「学縁」など、これまでにいろいろ異なる縁があったと思います。なかには「良縁」ばかりではなく、「奇縁」や「腐れ縁」もあったかも知れません。それもそれ、巡り合ふせなのですから、どんな縁であろうと縁でできたつながりは、確実に成

長の「肥やし」になってきたはずですが、社会に出れば、一緒に仕事をすする「社縁」が待っています。世の中には「すごく大きな人」がいますから、人生を決定づけるような縁が生まれるかも知れません。

私も縁を大切にしたいと思っています。今号で最終回となった『サンダル履き気まま旅』の連載を書いてくださった寺井融氏とは、私が某新聞社の政治部記者時代に知り合い、もう20数年來の良き友人です。

そしてまた、新たに粋な縁ができました。寺井氏の紹介で、春季号からの新連載『中大生の旅するチカラ』を書いていただくことになった本学経済学部卒で旅行作家の千葉千枝子さんです。縁が縁を呼ぶのは、人生の楽しみのひとつです。

(編集長 伊藤博)